

語釈

- 92 庭土はぬかるみになって、(いたるところに)濁り水が流れ込んできている。  
(大きな水溜りをつくっている。)
- 93 一方で(長く降り続いた雨もようやく上がり)晴れた空には赤い太陽が照り輝き、  
94 夕方になって日が沈みかけると、あおみどり色の幕をかかげたように太宰府の周辺の日々は、清しい。  
95 折に触れてこうした境遇に出会うと、心をむなしくすれば、(何もなくなるとした部屋に日の光が差し込むように)、自然に気も晴れてくる。
- 96 自由気ままに(書の世界に没頭し)、故人と語り合う中に、奥深い心境になることもある。

89○鶴

①古くは「たず」と呼ばれ、平安時代以降に「鶴」と呼ばれるようになった。古来より「鶴は千年」

といわれ「長寿を象徴する吉祥の鳥」として、また夫婦仲が大変良く一生を連れ添うことから「夫婦鶴」めおとづる」といわれて「仲良きことの象徴」の鳥として、鳴き声が共鳴して遠方まで届くことから「天に届く」天上界に通ずる鳥」といわれるなど、民衆の間に「めでたい鳥」として尊ばれてきた。

『漢詩の事典』(松浦友久編)の「鶴」の項では次のような説明をする。

鶴は、中国文学の世界では世俗を離れた高踏的な存在であり、高士・仙人の良き伴侶であった。(中略)鶴は俗世の時間を超越した存在であり、長寿を保つ鳥と考えられてきた。晋・崔豹の『古今注』(卷三)に「鶴は、千歳になれば即ち蒼に変ず。又た千歳にして黒に変ず。所謂玄鶴なり」。